

Oral presentation | Oral Presentation

🌾 Fri. Mar 29, 2024 5:00 PM - 5:45 PM JST | Fri. Mar 29, 2024 8:00 AM - 8:45 AM UTC | 🏠 Site C  
Shirakashi 1

**[C] Pest management/IPM (paddy field)**

5:00 PM - 5:15 PM JST | 8:00 AM - 8:15 AM UTC

[C-24] トラップ設置環境によるスクミリンゴガイ捕獲効率の差異

○Daisuque Kitano<sup>1</sup> (1. Shiga Pref Agri. Tech. Center)

---

5:15 PM - 5:30 PM JST | 8:15 AM - 8:30 AM UTC

[C-25] 八重山地域の水田におけるカメムシ類の種構成

○Suguru Ohno<sup>1</sup>, Rie Hosokawa<sup>2</sup> (1. Ishigaki Branch, OPARC, 2. Yaeyama Office, OPPPC)

---

5:30 PM - 5:45 PM JST | 8:30 AM - 8:45 AM UTC

[C-26] 茨城県のイネカメムシ成虫に対する各種薬剤の残効性

○Hiroshi Yatsuzuka<sup>1</sup>, Keisuke Saijyo<sup>1</sup>, Norio Kobayashi<sup>1</sup> (1. Ibaraki Agri Res Center.)

Oral presentation

## [C] Pest management/IPM (paddy field)

Fri. Mar 29, 2024 5:00 PM - 5:45 PM Site C (Shirakashi 1)

5:00 PM - 5:15 PM

### [C-24]トラップ設置環境によるスクミリンゴガイ捕獲効率の差異

○Daisuque Kitano<sup>1</sup> (1. Shiga Pref Agri. Tech. Center)

南米原産の外来種であるスクミリンゴガイは移植直後の水稻を食害するため、トラップを用いた捕獲による防除が導入されている。これまで、トラップの開発・改良や誘引効果の高い餌の探索などが行われてきたが、設置環境による捕獲効率の差異に関する知見は不足している。そこで、水田での捕獲調査と室内試験によって、水口側と水尻側、もしくは水深によって捕獲効率が異なるか検証した。水田での調査は2023年8月11～24日に滋賀県野洲市の4筆で実施した。スクミリンゴガイ用箱型トラップを3個/10 a設置し、6もしくは7日間隔で回収した。大型個体（殻高20 mm以上）と小型個体（20 mm未満）に分け、設置環境と捕獲効果を解析した結果、水口側と水尻側で捕獲個体数に有意な差はみられなかった。一方で、小型個体は同じ水田内でも水深が深い場所で捕獲数が少なく、水深が7～20 cmの範囲で深いほど捕獲数が有意に少なくなった。水深と捕獲効果の関係を室内試験でも検証したところ、殻のサイズによらず、捕獲率は水深7 cmよりも14 cmの場合に有意に低かった。以上の結果から、効果的な捕獲のためには、水深10 cmより浅い場所に等間隔にトラップを設置することが望ましいと考えられた。

Oral presentation

## [C] Pest management/IPM (paddy field)

Fri. Mar 29, 2024 5:00 PM - 5:45 PM Site C (Shirakashi 1)

5:15 PM - 5:30 PM

### [C-25]八重山地域の水田におけるカメムシ類の種構成

○Suguru Ohno<sup>1</sup>, Rie Hosokawa<sup>2</sup> (1. Ishigaki Branch, OPARC, 2. Yaeyama Office, OPPPC)

世界自然遺産登録地である西表島を含む八重山地域は、沖縄県内の米の主産地でもあり、このため本地域の水田は、湿地性の希少な生物種の代替生息地としての役割も担っている。その一方で、本地域では、主に斑点米カメムシ類への対策として、主要害虫種が特定されないまま、ネオニコチノイド系剤等の環境影響が大きい農薬が散布されている。この問題の解決のためには、斑点米をもたらず種を特定した上で各種農薬の殺虫効果を調べ、代替農薬を選ぶ必要がある。今回、こうした研究の第一歩として、石垣・西表・与那国島の水田で採集されたカメムシ類約2,400個体を種または属レベルまで同定した。その結果、計15科46種が確認され、この中でアカカメムシ、アカスジホソナガカスミカメ、ホソハリカメムシ、タイワンクモヘリカメムシとミナミホソナガカメムシの5種が目立って多く、これらの成虫だけで約半数を占めた。5種の構成比は島間で異なり、たとえば石垣・西表での最優占種はアカカメムシだったが、与那国ではホソハリカメムシだった。これら5種のいずれかが主要害虫となっている可能性があるが、九州以北で斑点米カメムシとして知られるのはホソハリカメムシだけであり、他4種の生態的知見は乏しく、斑点米生産能力も不明なため、今後詳しく調べる必要がある。

Oral presentation

## [C] Pest management/IPM (paddy field)

Fri. Mar 29, 2024 5:00 PM - 5:45 PM Site C (Shirakashi 1)

5:30 PM - 5:45 PM

### [C-26]茨城県のイネカメムシ成虫に対する各種薬剤の残効性

○Hiroshi Yatsuzuka<sup>1</sup>, Keisuke Saijyo<sup>1</sup>, Norio Kobayashi<sup>1</sup> (1. Ibaraki Agri Res Center.)

近年、イネカメムシは茨城県をはじめ全国的に発生が増加傾向にある。そこで本種に対する各種薬剤の残効性を調査した。実用濃度に希釈した薬剤を出穂後のワグネルポットのイネに散布し、処理0、3、7、10日後にその穂を採取して、県内水田から採集した成虫に与えた。その結果、7月採取個体群では、ジノテフラン液剤、エチプロール水和剤、スルホキサフロル水和剤、MEP乳剤で処理7日後の補正死亡率が100%となり、高い残効性が確認された。8月下旬～9月上旬採取個体群では、エチプロール水和剤が処理10日後において補正死亡率100%となり、高い残効性が確認された。一方でエトフェンプロックス乳剤は、処理7、10日後で補正死亡率は低く、残効性は低いと考えられる。採取時期によって結果が異なった要因は、気象条件による薬剤の分解速度の違いや、7月採取個体群は越冬世代成虫であったのに対して8月下旬～9月上旬採取個体群は第一世代成虫がメインであり、羽化直後の成虫が供試されたこと等が考えられる。過去に行った虫体浸漬法による調査では多くの薬剤が高い感受性を示しており、直接本種に薬剤がかかることで高い殺虫効果が期待されるが、穂における残効性は薬剤によって差が生じた。